

森信三の教育理念

Educational Philosophy of Shinzo Mori

佐藤実芳

Miyoshi SATO

はじめに

(1) 現在の日本の家庭の状況

日本の家庭の状況は、近年大きく変化している。まず第一に母親が専業主婦として子育てに専念することが少なくなった。

日本国憲法第14条（法の下での平等）の考え方が基礎となり、昭和60年に「勤労婦人福祉法」が「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律」に改正され、平成11年に現在の「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」に改められた。労働における男女平等の考え方が国民に浸透し、内閣府が実施した「女性の活躍推進に関する世論調査（平成26年8月）」では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に反対と答えた人が44.6%¹⁾で、過半数を超える人が共働きを理想と考えていることがわかる。厚生労働省の調査²⁾でも、出産1年前の段階で、かつ有職者で出産半年後も仕事を継続した女性は、平成13年には全体の25.1%であったのが平成22年には35.5%に上昇した。少子高齢社会を迎え、政府も「一億総活躍社会」を目指しており、今後益々共働き世帯は増加すると考えられる。

また離婚率の増加に伴い昭和63年から平成23年までの25年間でひとり親家庭が1.4倍（母子家庭が1.5倍、父子家庭が1.3倍）に増加している³⁾。平成23年度全国母子世帯等調査報告によると、母子世帯は1,237.7千世帯、父子世帯は223.3千世帯と推定されている。

たとえ母親が専業主婦であっても、核家族化や少子化の影響で子育ての仕方を知らないまま子育てをしているケースが多い。全中流階級といわれた時代と異なり、現在の日本では、子どもの6人に1人が貧困家庭で育てられており、家庭で十分な子育てがなされているかどうかが危惧される。児童虐待の発生も増加の一途を辿っている。

(2) 保育園・幼稚園・認定こども園等の家庭外保育の現状

現在、0歳児から保育所で保育される子どもは少なくない(表1参照)。3歳未満児の約3割、3歳以上児の約4割が保育所に入所している。保育所は、厚生労働省管轄の児童福祉施設で、家

庭での保育に欠ける乳幼児を対象とし、保育時間は原則1日8時間である。しかし利用する保護者が希望する保育時間は8時間以上で、早朝及び夕方の延長保育がなされている。24時間保育を実施している認可保育所もある。

表1：平成25年度の就学前教育・保育の状況

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
保育所	10.7%	30.2%	37.7%	43.9%	43.7%	43.4%
幼稚園				42.2%	51.7%	55.1%

一般社団法人全国保育士養成協議会 「幼児教育に関する資料」(平成27年10月23日教育課程部会幼児教育部会資料9)より作成

幼稚園は、文部科学省管轄の教育施設で学校の一種と扱われる。定められた標準保育時間は4時間であるが、延長保育を実施している園が多い。『平成26年度幼児教育実態調査』(文部科学省初等中等教育局幼児教育課 平成27年10月)によると、平成26年6月1日現在、延長保育を実施している幼稚園が全体の82.5%(公立:60.9%、私立95.0%)で、その大半が午後6時まで延長保育を実施している。中には午後7時を超える時間まで、延長保育を実施している園もある。学校の一種である幼稚園には長期休暇があるが、長期休暇中の預かり保育も78.5%(公立:56.2%、私立:86.7%)の幼稚園が実施しており、しかもそのほとんどが一日8時間以上の預かり保育を実施している。保育時間という視点から見ると、幼稚園と保育所の違いがなくなりつつあるといえるであろう。

尚、認定こども園は、家庭での保育に欠けるか否かに関係なく利用することができる、幼稚園と保育所の両機能を有する新しいタイプの保育施設である。その他、地域型保育事業として、小規模保育事業・家庭的保育事情・事業所内保育事業・居宅訪問型保育事業が児童福祉法に位置付けられている。

(3) 家庭での保育から幼稚園・保育所での保育へ

上記から、今の乳幼児は保育所や幼稚園等で昼間の時間の多くを過ごしていることがわかる。現在の日本では、従来家庭で行われていた子育てが、保育所や幼稚園等に託されている状況である。親が子育ての仕方を知らないため、保育所や幼稚園等任せの子育てになっているとも言える。親が必要に応じて柔軟に選択することができるよう、地域の実情に応じた13の「地域子ども・子育て支援事業」⁴⁾も創設されている。しかし極端な場合、トイレトレーニング等のしつけも保育所任せの家庭もあるという。

このような状況の今だからこそ、家庭で親が子どもにどのような教育をしたら良いのかということをはっきりさせることが必要である。それは、どのように子育てをしたらよいのか分からない親の指南書になるものであり、保育所や幼稚園等が意図的に取り入れていくべきものである。今の日本の上述のような状況を改善するため、乳幼児期からどのような教育が必要なのであろう

か。

その間に答えてくれたのが森信三（明治29年～平成4年）である。森は、戦後の教育状況を嘆き、「結局『人間の原点』に立ちかえり、そこから根本的に出直すほかない」⁵⁾と考えていた。京都大学・大学院で哲学を学んだ森信三は、大学での教育哲学や教育実績に関する講義は勿論のこと、小・中学生やその保護者など幅広く自らの教育理念を説き、多くの人に感銘を与えた。本稿では、森信三の著書である『一つ一つの小石をつんで』⁶⁾を中心に、彼の教育理念に現代的な視点を加えて、今日本に求められている家庭での教育を考察する。

1. 森信三が理想とする人間

森信三は『立腰教育入門』の中で、人間にとって一番大切なことを以下のように述べている。

われわれ人間にとって、一番大事なことは？と尋ねられたとしたら、私は

(一) 一度思い立ったなら石にしがみついても必ずやり抜く人間に — 同時に

(二) ホンのわずかな事でもよいから、とにかく他人のために尽す人間になること。

という二カ条が心に浮かびますね。⁷⁾

一つ目に大切なことは、どのような状況にあっても自己の一道を拓くことができる人間を育てることである。森はそれを「人間的主体の確立」と言い、人間的主体が確立した人間を育てることが、教育の最も重要な役割であると考えていた。

戦後の日本の教育は主体的な人間を育成することを目指して行われてきたが、実際には十分な成果を得ていないというのが、森の戦後の日本の教育に対する評価であった。教育の目標とするところに異論はないが、教育方法に問題があり、十分な成果が得られていないというのである。昭和20年代から30年代初めには、主体的な人間には「批判力」が必要であるという視点で学校教育が行われたが、相手の考え方や主張をよく聞き理解する力が十分には身につけておらず、理屈だけで実行が伴わない人間の育成に終わった。その後の学校教育では、批判するだけではなく考えることができる人間の育成が目指されたが、それも各教科における思考力に留まり、実践力に結びつくものではなかった。

二つ目に大切なことは、他人のために尽すことができる人間を育てることである。そのためには、自己中心的ではなく他人を思いやることのできる人格と、能力的に優れた人間に育てる必要がある。

森信三は、主体的で心身ともに優れた人間を育成するため独自の教育理念に基づく教育方法を考え、その方法を多くの人に熱心に説いた。

2. 人間形成の原点

森信三は、人間形成の原点はしつけにあり、しつけは人間形成の「礎石」を意味すると考えていた。人間の教育は、どのような「教育の定石」をいつ打つかが大切である。家庭であれば親が、学校であれば教員が、子どもが必要な定石を子どもが必要とする時期に打つことができるかどうか

かが教育の成功の鍵となる。『一つ一つの小石をつんで』の中で、森は「しつけはお説教等によってできるものでは断じてなく、文字通り一つ一つの小石を積むような心がけで、丹念に積み上げてゆくほかないものだ」⁸⁾と述べている。

森のしつけの3大原則は、(1)朝、挨拶すること、(2)名前を呼ばれたら、ハイと返事をする事、(3)靴を揃え、椅子を入れることである。このしつけを子どもにするのは、早ければ早いほど良いと考えられており、小学校入学前までにしつける必要がある。小学校入学後も、年齢に応じたしつけを行い、小学校卒業までにしつけを完了させる。

しつけが完了(13歳前後)すると、次に子どもが将来望ましい生き方をするための種まきに取りかかる。森の考えでは、人間は何事に対しても「構え」が大切であり、自分が目指す一点に向かって集中でき、どのような困難に遭遇しようとも一生やり抜くことができる精神力を身につけさせるための修練をすることが必要であると考えていた。それを、日常的な姿勢と、授業中「はい」と手を上げることによって子どもに身につけさせようと考えていた。これが心の種まきの土台作りである。

次に子どもの心の種まきである。子どもに、功績を称えられる偉人の伝記を読ませ、最も気に入った偉人の年表を作成させて暗記させる。それが、心の種まきである。種まきをしたら、肥料として、(1)朝、家族に起こされなくても一人で起きること、(2)常に腰骨を立てること、(3)学校から帰宅後の家庭生活にも時間割をつくり、テレビの視聴時間をできるだけ短くすること、の3点を実践させる。

森信三は、幼児期からのしつけで主体的な人間に成長することができる基礎を作った後、主体的な生き方が出来るように子ども自身が日常生活の行動を厳しく律することを求めたのである。

3. しつけの3大原則

しつけの3大原則である(1)朝、挨拶すること、(2)名前を呼ばれたら、ハイと返事をする事、(3)靴を揃え、椅子を入れることは、親が子どもにしつけるべき根本的な3点であると、森は考えていた。それは、単に日常の生活習慣としてのしつけを主張したのではなく、直接見ることはできない子どもの心の状態を把握するために絶対不可欠なものであるからである。

森は、朝の挨拶と返事が出来るということは、「我」が抜けた証拠であると表現している。つまり、親の言うことを素直に受け入れる姿勢が子どもに育っている証といえる。子どもの心がその状態にならないと、親は次のしつけや教育をすることができない。親の言うことを素直に受け入れる姿勢が子どもに育っていると、小学校に入学後、教員の指導を素直に受けることができ、友達の意見を聞き理解した上で自分の考えを発表することができる。将来的には上司からの指導を素直に受けることが出来る社会人になり、職場の同僚とのコミュニケーションも問題なく行うことができることに繋がるであろう。

森が推奨する朝の挨拶と返事の家での指導方法は、母親が手本を示すという極めて簡単なものである。母親が、夫や子どもに「おはようございます」と挨拶し、夫に呼ばれたら「ハイ」と返事をするだけでよい。子どもはその母親の姿を見て、挨拶と返事ができるようになるのである。

森が活躍した時代は、まだ家庭において男女の役割分担が明確で、男女が必ずしも平等ではなかった。

尚、森は家庭教育において、父親と母親の役割は異なると考えていた。母親の役割は子育てと家事にあり、父親の責任は家族の生活の糧を得ることにある。そのため、母親が子どものしつけの責任を持つというのが、森の考え方であった。この点、多様化した現在の日本の家庭状況には必ずしも合致するとは言えないが、どのような形態の家庭であろうとも、子どもに対する挨拶と返事のしつけの意味は変わらないと思われる。

3つ目の靴を脱いだら靴を揃え、席を立ったら椅子を入れるというしつけが最も難しいとしつけと、森は考えていた。その理由は、このしつけが「人間のしまり」と「お金のしまり」に繋がるからである。金銭的な問題は結局心の問題であるがゆえ、金銭的なことは心にしまりがあるか否かで決まる。心にしまりがなければ、金銭的にルーズになり、世間的な信用を失墜しかねない。その為、森は3つのしつけの中でこのしつけが一番難しいと考えていた。今問題となっているカード破産等は、「お金のしまり」がない典型といえるのではないであろうか。

以上3つのしつけは、小学校入学前にするのが理想であるだけでなく、小学校入学前なら楽にしつけることが可能である。3つのしつけは、早ければ早いほど良い。3つのしつけは、小学校生活でも必要である。小学校に入学してくる全児童が、(1)朝、挨拶すること、(2)名前を呼ばれたら、ハイと返事をする事、(3)靴を揃え、椅子を入れることができれば、小学校入学後の教育を順調に行うことができるであろう。小学校で問題となっている小一プロブレムと言われる問題も、発生することはありえない。小学校教育の視点から考えても、小学校入学前の3つのしつけは理に適っているといえる。

4. しつけの仕上げ

3原則のしつけを小学校入学前に完了させ、小学校入学後は子どもの年齢、性別、性格に応じたしつけをしていく。

小学校に入学したら子どもにさせるのが、夜寝る時に脱いだ服をたたんで枕元に置くことである。これは明朝の準備にもなる。朝は脱いだパジャマをたたむことができれば、日常生活の自立の一步といえる。また、このしつけがこの後に続く布団の片付けの下準備となる。

現代の日本では洋風のベッドを使っている家庭も多いが、以前の日本の家庭では夜布団を敷き朝押し入れに片付けるという生活が一般的であった。布団を押し入れに片付けるのは、小学校低学年の身長と力では無理である。しかし、時期がきたら子どもに布団を片付けさせないと、高校生になっても親に布団を片付けさせるという情けない人間に育ってしまう。このしつけは、洋風に考えれば、起床したらベッドメイキングさせるということになる。小学校の低学年から、夜寝る時に、脱いだ服をたたんで枕元に置くしつけをすることで、5年生を目安に布団を片付けさせることができる。ベッドメイキングの場合は、高い身長も力もそれ程必要がないので、もう少し早い

段階で子どもにさせることが可能であると思われる。

小学校3・4年生になったら、家の仕事の1つか2つかを、責任を持ってさせるようにすることが大切である。子ども心に、自分は家族の一員であるという自覚を持たせるためである。特に女子に限定して、小学校4年生ぐらいから配膳準備の手伝いを始めさせ、徐々に後片付けもさせることと、小学校5・6年生から家族の靴磨きをさせることを、森は薦めている。目的は、将来地に足のついた生活をさせるためである。靴磨きをすることで、家庭の経済状況を理解することができ、家庭に見合った分相応の行動を取ることができるようになる。また、靴磨きや食事の準備と後片付けをすることで、女性として将来家庭でしなければならないことが自然と身に付く。森は、それが「しつけのおもり」であると表現している。

最後のしつけは、小学校5・6年生で、家族に起こされなくても朝自分で起きる子どもにすることである。これが出来たら、親としての責任はほぼ完全にすんだと考える。しかしこのしつけは、小学生では極めて難しい。この後紹介する人生の種まきの後の肥料にもなるしつけである。

小学生のしつけに関して、森が明治生まれであることもあり、男女を区別するところは今日的視点から検討すると問題がないわけではない。しかし、女子だけでなく男女共通して行うしつけと考えれば、今の時代においても十分通用する教えである。子どもが小学校を卒業するまでに、家庭での日常生活を自立させ、家庭の実情を理解させ、生きていく上でしなければならないことを身につけさせる。これらはすべて、主体的な人間形成には絶対不可欠なことである。

5. 人生の種まきの土台作り

森は、人生の種まきの前の土台作りとして、「構え」と、一点に向かって集中でき、一生やり抜く修練をすることが大切であると考えていた。

自ら望む人生を生き抜くためには、「構え」が大切であり、男は男らしく女は女らしくと小学生の子ども達に教えた。以下は、昭和46年に開催された信州大学教育学部附属長野小学校4年生～6年生の子ども達に向けた講演会での森の言葉である。

「男の人の足の置き方は、獅子の前足のようにながと構えるのですよ。そして女の人はまだ割らない割りばしのようにひざがしらがあかないように、きちんと腰掛けるのです。

・・・(中略)・・・男のくせに、ひざのところを、こんなにくっつけているなんてひと目でいくじなしとわかりますね。・・・(中略)・・・女の人は、ピシッとひざをつけるのですね。もしそれを窮屈だと思ったら、女としてのねじがゆるんでいる証拠です。」⁹⁾

ジェンダーフリーの考え方からしたら問題になる発言かもしれないが、座り方に関しては、現在の社会でも同じことが求められている。特に、就職活動の面接のときにこの「構え」が求められることは自明である。

森は、自分のすることに全力を込めて取り組めるかどうかで人間の価値が決まるという考えを、子ども達には授業中「はい」と手を上げるという行為を取り上げて説明している。それは、子ども達が学校で日常的に最も多く行う行為だからである。

通常、授業中に挙手するのは、授業の内容が理解できているかどうかの印である。しかし、森は、単に挙手するのではなく、5本の指を揃え、まっすぐに、速く挙げることにより、自らを鍛錬することが出来ると説いている。手のあげ方一つで、教員の児童生徒に対する印象は変わる。つまり、子ども時代に手の上げ方で自分を鍛錬することにより、何事でも全力を尽くし、一生やりぬく習慣を身につけることが大切なのである。その習慣を体得していれば、立派な社会人になることができるというのである。

現在の日本の新規卒業者の離職率の高さ、ニート状態の若者の多さなどを考えると、人生の種まきの土台作りが十分なされていないのではないかと感じられる。自分のすることに全力を込めて取り組めるかどうかで人間の価値が決まるということは、『修身教授録』¹⁰⁾にも記されおり、将来教員になっていく学生にも教えていた。

土台作りの3つ目は、「立腰」という森が長年実践し推奨する独特の姿勢をとることである。「立腰」とは腰骨を立てた姿勢で、この姿勢をとることで、集中力が増し、健康になるという。「立腰」に関しては、紙面の関係上また別の機会に詳しく紹介したい。

6. 人生への種まき

人生の種まきには、子ども自身が行うことと、父親が行うことがある。

子ども自身が行うこととして、13歳前後で将来どのような人間になるかを決意することが必要であると森は考える。具体的な職業を選択するというのではなく、優れた人間になってみせるという決意表明をすることである。そのために必要なのが、優れた偉人の伝記を読むことである。偉人と言われる人は、堅実な計画をたて、絶対にやり抜く強い精神力で、どんな苦難に遭遇しようとも自らの計画を実現している。

森が子ども達に薦めるのは、お気に入りの偉人の伝記を手元に置き、年表を作ることである。そして「人生二度なし」と書いて、偉人の誕生からの年表を作成して覚えることが、人生への種まきである。お気に入りの偉人の伝記が、これから生きていく子ども達の人生の道しるべになるのである。

子どものしつけは母親の責任であると前述したが、父親は仕事に専心する姿を子どもに見せることにより、社会の一員として重要な役割を果たしていることを子どもに伝える役割がある。勿論幼児期児童期も、父親が子どものことを考えていることが伝わるように、子どもが困っている時に相談に乗ることなどは必要である。父親は叱るより褒めるよう心がけることが大切である。

父親には子どもが高学年になった頃から、偉人の伝記にはできない「人生の生き方」の種まきをするという重大な役割が課されている。しかしこれも方法は簡単である。社会での出来事につ

いて母親と話すのを子どもに聞かせることにより、子どもに社会への関心を持たせ、子どもにこれからの自分の生き方を考えさせるということである。勿論親としては意図的に行うわけではあるが、子どもには自然な会話に思えるようにしなければならないので、母親との連携が必要である。

次に、種まきの後の肥料となるのが、子どもが自分の行動を厳しく律することにより、自分が目指す人間になることができるように努力することである。

肥料の第一が、朝一人で起床することである。一人で起床することは、小学校のしつけの仕上げとして既に紹介したが、実際に小学生が実行することは簡単なことではない。朝子どもが一人で起きることが出来るようになれば、発芽した証であると森は述べている。

2つ目の肥料が、土台のところでも紹介した「立腰」である。そして最後の肥料が学校から帰宅した後の過ごし方である。時間割を作成してテレビを見る時間を極力短くするというのである。子ども達にとって、テレビの視聴は楽しみであり、それを自ら制限するというのは、非常に強い意思が必要である。テレビの誘惑に勝つことが出来る意志の強さがあれば、お気に入りの偉人のような素晴らしい人間に成長することが出来るのである。当時はテレビしかない時代であった。今はテレビに加えゲームをしたりスマートフォンを使用する時間の制限になるであろう。

小学校高学年から中学生にかけて、子ども自身が人生への種まきをし、自分で肥料を与えることで、種を発芽させ、育てていくのである。早い時期から将来の具体的な職業を決めさせるのではなく、社会の現実を知り、社会が受け入れてくれるような人間として成長することができるように、子ども自身が努力するように促している。

終わりに

戦前生まれの森信三には、父親と母親、男子と女子とでは扱いが異なるという問題がある。一人親家庭が増加し、ジェンダーフリーが目指されている今日、森の全ての主張を取り入れることは難しい。しかし、森の教育理念は、子どもにいつ何をすれば良いかが明解に示されている点で、誰にでも理解できる素晴らしいものである。しかも、それは決して多くのことではなく、極めて重要なことだけを指導すればよいという点で、仕事で忙しい親でも実行しやすいものである。

子どもの教育は、基礎作りこそ最も重要である。それが、(1) 朝、挨拶すること、(2) 名前を呼ばれたら、ハイと返事すること、(3) 靴を揃え、椅子を入れることの3点である。取り組もうという気持ちがあれば、どのような家庭でも実践することができる。小学校卒業時に日常生活で自立できるように指導することは当然必要なことである。しかし、今の子ども達の多くが、小学校卒業段階では日常生活で自立できていない、というのが現実である。

しつけに関しては、その目的とするところの意味が深い。特に幼児期のしつけに関しては、人間の基礎作りであり、この時期を逃したら子どもの人格上取り返しがつかない事態に陥ってしまう可能性がある。機械的に挨拶と返事をさせるのもしつけではある。しかし森の挨拶と返事のし

つけの目的は「我」を抜くためであり、本当の意味の心の教育といえるであろう。

生き方に関しても、現在では小学校からキャリア教育が実施されており、職業に関する知識が提供されるが、社会がどのような人間を求めているかと言う最も核心的なことを子ども達は理解していない。自分に課された課題に対して全力で取り組み、自分が目指す優れた人間になれるように努力する人間こそ、社会が期待している若者である。子ども自身が日々切磋琢磨することによってこそ、子どもは自ら大きく成長すると考える。

森信三の教育は、『一つ一つの小石をつんで』という書名が示すように、幼児期から丁寧に積み上げていく教育である。何事も土台が大切である。家庭での子育ては時間と手間をかけて土台作りをするだけである。決して専門的で難しいことが求められるわけではなく、誰にでも心がけ次第でできることである。森の教育理念を理解した上で、幼児期から人間として豊かな心と強い精神力を育み、社会で主体的に活躍できるような人間に育てていくことが、今こそ求められている。

注

- 1) 「賛成」12.5%、「どちらかといえば賛成」32.1%
- 2) 厚生労働省『第13回21世紀出生縦断調査（平成13年出生児）及び第4回21世紀出生縦断調査（平成22年出生児）の概況』、平成27年12月15日、5頁、13頁。
- 3) 厚生労働省『ひとり親家庭等の現状について』、平成27年4月20日。
- 4) 利用者支援事業、地域子育て支援拠点事業、一時預かり事業、乳児家庭全戸訪問事業、養育支援訪問事業等、子育て短期支援事業、ファミリー・サポート・センター事業、延長保育事業、病児保育事業、放課後児童クラブ、妊婦検診、実費徴収補足給付事業、多様な事業者の参入促進・能力活用事業
- 5) 森信三『一つ一つの小石をつんで』、実践人の家、昭和48年、11頁。
- 6) 昭和46年、信州大学教育学部附属長野小学校で保護者及び児童向けの講演会の筆録と、保護者と子どもの感想文から構成されている。
- 7) 寺田清一編『森信三先生「立腰教育入門」』、昭和54年、29頁－30頁。尚、同書の奥付には、出版社は記載されていない。
- 8) 森信三、前掲書、12頁。
- 9) 同上書 56頁。
- 10) 昭和12年、森が大阪府天王寺師範学校（現：大阪教育大学教育学部）の修身を担当した時の講義記録。

参考文献

1. 石橋富知子『子育ての秘伝 立腰と躰の三原則』、高木書房、平成24年。
2. 寺田清一編『森信三先生「立腰教育入門」』、昭和54年。
3. 森信三『一つ一つの小石をつんで』、実践人の家、昭和48年。
4. 森信三『修身教授録』、致知出版社、平成元年。